

浮

舟

泉

鏡
花

「浪花江の片葉の蘆の結ばれかかり——よいやさ。」

ど蹠踉として、

「これわいな。……いや、どっこいしょ。」

脱いで提げたる道中笠、一寸左手に持換えて、紺の風呂敷、桐油づつみ包、振分けの荷を両方、蝙蝠の憑物めかいて、振落しそうに掛けた肩を、自棄やけに前に突いて最も一ひつ蹠踉よろける。

「……解けてほぐれて逢う事ことか。何を言いやがる。……此方こつちあ可いい加減どろに溶とけそうだ。……まつにかいあるヤンレ夏の雨、かい……とおいでなすつたかい。」

さつと沈めた浪の音。磯馴松そなれまつは一樹ひとき、一本ひと本、薄い枝に、濃い梢に、

一ツずつ、翠、淡紅色、絵のような、旅館、別荘の窓灯を掛連ね、

松露が恋に身を焦す、紅提灯ちらほらと、家と家との間を透く、白

砂に影を落して、日暮の打水のまだ乾かぬ茶屋の葭簀も青薄、婦の

姿もほのめいて、穂に出て招く風情あり。此処は二見の浦づたい。

真夏の夜の暗闇である。この四五日、引続く暑さと云うは、日中

は硝子を焼くが如く、嚇と晴れて照着ける、が、夕風とどもに曇よ

りと、水も空も疲れたように、ぐったりと雲がだらけて、煤色の飴

の如く粘々と搔曇って、日が暮れると墨を流し、海の波は漆を畝ら

す。これでいて今夜も降るまい。癖に成って、一雫の風を誘う潮の

香もないのであった。

男は草鞋穿、脚絆の両脚、しゃんとして、恰も一本の杭の如く、

松を仰いで、立停って、……眺を返して波を視た。

「ああ、唄じゃねえが、一雨欲しいぜ……」

俄然として額を叩いて、

「慌てまい。六ちゃん、いや、ちゃんと云う柄じゃねえ。六公、六でなし、六印、月六齋でいやあがら。ははははは。」

肩を刻んで苦笑いして、またふらふらと砂を踏み、

「野宿に雨は禁物でえ。」

その時躓く。……

「これわいな！ 慌てまいとはこの事だ。はあ、松の根ツ子か。この、何でもせい。」

岸辺の茶屋の、それならぬ、渚の松の舫船。——六蔵は投遣りに

振った笠を手許に引いて、屈腰に前を透かすと、つい目の前に船首が見える。

船は、櫂もなく艫もなくなしに、浜松の幹に繋いで、一棟、三階立は淡路屋と云う宏壮な大旅館、一軒は当国松坂の富豪、池川の別荘、清洒なる二階造、二見の浦の海に面した裏木戸の両の間、表通りへ抜路の浜口に、波打際に引上げてあつた。

夫女巖へ行くものの、通りがかりの街道から、この模様を視めたら、それも名所の数には洩れまい。舩に鱈は飛ばないでも、舩に蒼い潮の鱗。船は波に、海に浮べたかと思われる。……が藍を流した池のような浦の波は、風の時も、渚に近いこの船底を洗いはせぬ。戯れにももづなの舩を解いて、木馬のかわりにぐらぐらと動かしても、縦横に揺れこそすれ、洲走りに砂を汀って、水に攫われるような憂はない。

気の軽い、のん気な船は、件の別荘の、世に隔てを置かぬ、ただ

夕顔の杖ばかり、四ツ目に結った竹垣の一重を隔てた。濡縁越ぬれえんごしの座敷から聞え来る三味線の節の小唄の、二葉ふたは三葉みは、松の葉に軽く支えられて、流れもあえず、絹のような砂の上に漂っているのである。

二

「この何でもせい。……住吉の岸辺の茶屋に、よいやさ。」

ど風体ふうたい、恰好やぐざ、役雑やくざなものに名まで似た、因果小僧とも言いそうな這奴しやつ六蔵むくざうは、その舩ふなぼたに腰を掛けた、が、舌打して、

「ちよッ面倒だ。宿銭どまりは鏝びたでお定さだまり、それ、」

ど笠を、すぼりと落とし、次手ついでに振分の荷を取って、笠の中へ投げ込んで、

「いや、お泊りならばア泊らんせ、お風呂もどんどん湧いている、障子もこの頃はりかえて、畳もこの頃かえてある。——嘘を吐きやあがれ。」

空手を組んで、四辺を見たが、がツくりと首を振って、

「待てよ……青天井が黒光りだ。電は些ど気が無えがね、二見ヶ浦は千畳敷、浜の砂は金銀……だろう、そうだろそうだろ然うである。成程どんどん湧いていら、伊良子ヶ崎までたつぷりだ。ああ、しかし暑いぜ。」

腕まくりを肩までして、

「よく皆、瓦の下、壁の裡へ入ってやがる。」

瓦の下、壁の裡、別荘でも旅館でも、階下も二階もこの温気に、夕風の潮を避け、南うけに座を移して、伊勢三郎が物見松に、月も

あらば盗むべく、かみじやま 神路山、あさまがたけ 朝熊嶽、五十鈴川、宮川の風にこがれて
いるらしい。もののけはい 氣勢も人声も、街道向はむき 賑かに、裏手には湯殿
の電燈のおくら 小暗きさえ、あかり 燈は海に遠かった。

六蔵ニヤニヤと独笑して、

「お寝間のお伽てんごもまけにしてと——姉さん、真個ほんごかい、洒落しやれだぜ洒
落だぜ洒落じやねえ。入いらつしやい、お一方ひとかた、お泊とどでございますよ。

へい、お早つぎさまいお着様で、難有ありがとう存じます。これ、御濯おすす足の水みづを早く
よ。あいあい、とおいでなさる。白地てぬぐいの手拭、紅たすきい襷たすきよ……柔やわらかな指
で水と来りや、俺たらいあ盥たらいで金魚きんぎょに化けるぜ。金魚うや、金魚う。」

と可いい気な売声。

「はてな、紺なまずがすりに、紺の脚絆なまず、おかしな色の金魚なまずだぜ。畜生なまずめ、
鯰なまずじやねえか。匆はねる処はは鮒やつだ奴やつさ。鮒やつだ、鮒やつだ、鮒やつ侍ふなざむれえだ。」

ど胸を揺つて、ぐつと反つたが、忽ち肩ぐるみ頭をすくめて、
「何を言やあがる。」

で、揚あしを左の股、遣違いにまた右て。燈は遠し、手探りを、何の気もなく草鞋を解いて、びたりと揃えて、トンと船底へ突込むど、殊勝な事には、手拭の畳んで持ったをスイと解き、足の埃をはたはたと払つて、臀で楫を取つて、ぐるりと船の胴の間にのめり込む。

「御案内引あいあい……」

ど自分で喚き、

「奥の離座敷だよ、……船の間——とおいでなすつた。ああ、佳い見晴、と言いてえが、暗くツて薩張分らねえ。」

勝手な事を吐くうちに、船の中で胡坐に成つた。が兎が權を押さな
いばかり、狸が乗つた形である。

「何、お風呂だえ、風呂は留めだ。こう見えても余り水心のある方じゃねえ。はははは、湯に水心も可笑いが、どんどん湧いてるは海だろう。——すぐに御膳だ。膳の上で一銚子よ。分ったか。脱落もあるめえが、何ぞ一品、別の肴を見繕つてよ、と仰せられる。」

と仰せられ、

「ああ、いい酒だぜ、忠兵衛のおふくろかい、古い所で……妙爛妙爛。」

と二つばかり額を叩く。……暢気さも傍若無人で、いずれ野宿の、ここに寝てしまうつもりでいよう。舩船を旅籠とより、名所を座敷にしたようなことを吐す。が。僅か一時ばかり前、この町通り、両側の旅籠の前を、うろついて歩行いた折は、早や日も落ちて、脚にも背にも、放浪の陰の漾った、見るからみじめな様子であった。

たそがれ
 黄昏に、御泊を待つ宿引女の、廂はずれの床几に掛けて、島田、
 まるまげ いちようがえし なで
 円鬘、銀杏返、撫つけ髪の夕化粧、姿を斜に腰を掛けて、浅葱に、
 白に、紅に、ちらちら手絡の色に通う、団扇の絵を動かす状、もの
 言う声も媚かしく傾城町の風情がある。

浦づたいなる掃いたような白い道は、両側に軒を並べた、家居の
 中を、あの注連を張った岩に続く……、松の蒔絵の貝の一筋道。

こおりみせ やすみぢやや
 氷店、休茶屋、赤福売る店、一膳めし、就中、鶉の鳴くように、
 けたたましく往來を呼ぶ、貝細工、寄木細工の小女どもも、昼から
 夜へ日脚の淀みに商売の逢魔ヶ時、一時鳴を鎮めると、出女の髪が
 黒く、白粉が白く成る。

優しい声で、

「もし、お泊りかな。」

「お泊りやすえ。」

彼方あつちでも、お泊りやす、此方こつちでも、お泊りやす、と愛嬌声の口許

は、松葉牡丹の紅である。

「泊るよ。」

其処そこへ、突掛つツかけに 紺がすりの汗ばんだ道中どうちゆうを持って行くど、

「はい、お旅籠は上中下と三段にございますがな、最下等にいたし

ましても……」

何うどして、こんな旅籠へ一宿出来よう、服装みなりを見ての口上に違

ないから。

「何だ。無価た泊めたようと云うのじゃねえのか。」

「外ほかを聞いておくんなはれ。」

「指揮さしずは受けねえ。」と肩を揺つて、のっさり通る。

「お泊りやす。」

「俺か。」とまたずつと寄る。

「否うへ、違ちがいまんの。」

「状ざうあ見ろ、へへん。」

ど、半分白い目で天を仰いで、拗ねたようにそのまま素通すとおと。

この辺あたとて、道者宿、木賃泊りが無いではない。要するに、容子ようすの好い婦人たはが居て、夕ゆふをほの白く道中を招く旅籠では、風体の恁かくの如き、君を客にはしないのである。

荷にも石瓦いしがわら、古新聞、乃至なにし、懐中ふでこは空からっぽでも、一度目指した軒を潜つて、座敷に足さえ踏掛ふんがくれば、鉾子を倒し、椀を替え、比目魚ひらめ

だ、鯛だ、ど贅を言つて、按摩まで取つて、ぐっすり寝て、いざ出
発の勘定に、五錢の白銅一個持たないでも、彼はびくとも為るので
はなかつた。

針が一本——魔法でない。

この六でなしの六蔵は、元來腕利きの仕立屋で、女房と世帯を持
ち、弟子小僧も使つた奴。酒で崩して、賭博を積み、いかさまの目
ばかり装つた、己の名の旅双六、花の東都を夜遁げして、神奈川宿
のはずれから、早や旅銭なしの食いつめもの、旅から旅をうろつく
こと既にして三年越。

右様の勘定書に対すれば、洗つた面で、けろりとして、

「おう、仕立ものの用はねえか。羽織でも、袴でも。何にもなきや
経帷子を縫つて遣ら。勘定は差引だ。」

女郎屋の朝の居残りに遊女おんなども顔あを刺つて、虎口ここうを遁のがれた床屋がある。——それから見れば、旅籠屋や、温泉宿で、上手な仕立は重宝ちようほうで、六の名は七同然しち、融通ゆうずうは利き過ぎる。

尤もつとも仕事を稼かせぎためて、小遣こづかいのたしにするほどなら、女房を棄すてて流浪りうりやうなんかしない筈。

からつけつの尻端折しりっぱしより、笠一蓋かさいちがいの着きたツ切雀きりすずめと云うも恥はかしい阿房鳥あほうどりの黒扮装くろいでたちで、二見ヶ浦ふたみぐらに堀ほりを捜たして、

「お泊りだ、お一人さん——旅籠りゆうろうは鏝びたでお定きまり、そりや。」と指二本でおんな、出女でんなの目め前まへぬいと出す。

誰たれが対手あいてに成なるものか、黙もくつて動かうかす団扇うちあしの手は、浦風うらしろを軒のきに誘いつて、背後うしろから……塩花しおばな塩花。

四

六は門並六七軒。

風体と面構つらまえで、その指二本突出して、二両を二百に値切つても、怒つて喧嘩はしないけれど、誰たれも取合うものはなし。

いざ、と成れば、法もかく、手心は心得たが、さて指当さしあたつて、腹は空く、汗は流れる、咽喉のどは乾く、氷屋へ入る仕覚しがくも無かつた。

すねた顔色つらつき、ふてた図体ずうたい、そして、身軽な旅人の笠捌かささばきで、出女のしあるの中を伸歩のしある行く、白徒しれものの不敵らしさ。梁山泊りょうざんぼくの割符わりふでも襟えりに縫込ぬいこんでいそうだったが、晩ゆふの旅籠りやうにさしかかった飢うえと疲労つかれは、……六よ、怒るなよ……實際じつじ余所目よそめには、ひよろついで、途方に暮れたらしく可哀あわれに見えた。

この後を、道の小半町こはんちよう、嬉しそうに、おかしそうに、視ながめ視ながめ、片頬笑みをしながら跟ついて歩ある行あるいたのは、糊ゆのきいた白地の浴衣ゆかたに、絞へりの兵児帯無雑作へこにぐるりと捲たいた、耳許みみもとの青澄あんで見えるまで、頭髪かみのけの艶つやのいい、鼻筋はなすねの通とつた、色の浅黒あさくろい、三十四五さんじゅうごの、すつきりとした男おとこで。何処どこにも白粉おしろいの影かげは見えず、下宿屋げしやくの二階にがいから放ほう出した書生しよせいらしいが、京阪地きやうはんちにも東京とうきやうにも人ひとの知しつた、異辰吉いぢんきちと云いう名題なだいの俳優やくしや。

で、六むが砂まぶれの脚絆かきんをすじりもじつて、別荘べつしやうの門かどを通とつたのと、一足違いいに、彼は庭下駄にわげたで、小石こいしを綺麗きれいに敷詰敷めた、間々あひあひに、濃のいと薄うすいと、すぐつて緋色ひいろなのが、やや曇くもつて咲さく、松葉牡丹まつばぼたんの花はなを拾ひろつて、その別荘べつしやうの表うらの木戸きどを街道かいだうへぶらりと出でた。

異いは時ときに、酔よざましの薬くすりを買かひにい出でたのであつた。

客筋と云うのではない、松坂の富豪池川とは、近い血筋ほどに別懇こんな親類交際づきあい。東に西に興行の都度つど、日取の都合が付きさえすれば、伊勢路に廻って遊ぶのが習いで、別わけて夏は、三日なり二日なり此処に來ない事はないのであつた。

今度も、別荘の主人が一所いっしょで、新道の芸妓お美津みつ、踊りの上手なかるたなど、取巻大勢どりまきと、他に土地の友だちが二三人で、昨日から夜昼なし。

向う側の官営煙草、兼ねたり葉屋へ、ずっと入つて異が、

「御免よ。」

「はい、お出でなさいまし。」

唯と、側対かわむかいの淡路屋の軒前のきさきに、客待きやくまちうけの円鬻つつかかに突掛つて、六でなしの六蔵が、（おい、泊るぜえ）を遣らかす処。——考えても——

上り端あがには萌黄と赤と上草履をずらりと揃えて、廊下の奥の大広間には洋琴ピアノを備えつけた館と思え——彼奴きやつが風体。

傍見わきみをしながら、

「宝丹ほうたんはありますかい。」

「一寸ちやと、ござりまへんで。」

「無い。」

「左様さいで、ござりません。仁丹が可ようござりますやろ。」と夕間暮ゆらまぐれの薬くすり箆すりに手を掛ける、とカチカチと鳴る環かんとともに、額の抜上った首を振りつつ大おおな眼鏡越おきにじろりと見やる。

「宝丹が欲しいんだがね。」

「強えらい、お生憎あいにくさま様で。」

「お邪魔を。」

「何うだ、姉え、これだけじゃ。」

六は再指二本。

この、笠ぐるみ振分けを捲り手の一方へ、禪も見える高端折、脚絆ばかりの切草鞋で、片腕を揮ったり、挙げたり、鼻の下を擦ったり、べかこと赤い目を剥いたり、勝手に軒をひやかして、ふらふらと街道を伸して行くのが、如何にも舞台馴れた演種に見えて、異はうかうか独笑してその後続いたのである。

五

やがて一町出はずれて、小松原に、紫陽花の海の見える処であった。

「君、君。」

何と思つたか、巽がその六でなしを呼んだのである。

「ええ、手前で、へい。」と云うと、ぎっくり腰を折って、膝の処へ一文字に、つん、と伏せた笠の上、額を着けそうにして一ツおじぎをした工合が、丁寧と言えば丁寧だが、何と老人を食つた形に見える。

辰吉は片頬笑して、

「突然で失礼ですがね、何処此処と云つてるよりか、私の許へ泊つちや何うです。」

「へい、貴方へ。」と、俯向けていた地薄な角刈の頭を擡げて、はぐらかす気か、汗ばんだか、手の甲で目を擦って、ぎろりと巽の顔を見た。

「何うです、泊りませんか……ッたつてね、私も実は、余所の別荘に食客と云うわけだが、大腹な主人でね、戸締りもしない内なんだから、一晚、君一人ぐらい、私が引受けて何うにもしますよ。」

「へええ、御串戯を。」と道の前後をみまわして、苦笑いをしつつ、一寸頭を搔いたは、扱は、我が拳動を、と思つたろう。

「串戯なもんですか。」

其処が水菓子屋の店前で——異は、別に他に見当らなかつたので、——居合す小僧に振向いて、最う一軒菓子屋はないか、と聞いて、心得て出て、更めて言った。

「真個だよ、君。」

と笑いながら、……もう向うむいて行きかける六蔵を再呼んで、
「……今君が通つて来た、あの、旭館と淡路屋と云う大な旅館の間

にある、別荘に居るんだからね。」

「何ありがてとも難おぼしめし有え思召で、へい。」

ど、も一度笠を出して面つらを伏せて、

「いづれまた……」

「ではさようなら。」

「御機嫌よろしゆう。」

二見ヶ浦を西、東。

思いも掛けない親船に、六はゆすぶった身体を鎮めて、足腰をし、
や、ゆんと行く。

「兄さん、兄さん。」

「親方。」

ど若い女が諸声で、やや色染めた紅提灯、松原の茶店から、夕顔

別当、白い顔、絞の浴衣が、鬮然ひらりと出て、六でなしを左右から。

「親方。」

「兄さん。」

「ええ、俺おらが事か。兄さん、どけつかったな。聞馴ききなれねえ口を利きやあがる。幾千いくらで泊める。こう、旅籠は幾千だ。」

「否ちや、宿屋じゃありません。まあ、お掛けなさいな。」

「よう一寸。」

「何にも持たねえ、茶代が無えぜ。」

「何んですよ、そんな事は。」

「はてな、聞馴ききなれねえ口を利きやあがる。」

「その代りね、今、親方、其処で口を利いたでしょう。」

「一寸、あの方は何と云って。矢張やっぱり普通ただの人間とおんなじ口の利

き方をなさる事？ 一寸さあ……」

と衣紋えもんを抜く。

六蔵解よめぬ面の眉しかを擡あめ、

「何だ、人間の口の利方きまかただ？……ほい、じゃ、ありや此処ここ等の稲荷様か。」

「まあ！」

「何だい？」

「あら、名題の方じゃありませんか、異さんと云う俳優やくしやだわよ。」

「畜生ちくじやうめ、此奴等こいつら、道理で騒さわぐぜ。むむ、素顔すげんにやはじめてだ。」

と、遠くを行く辰吉のすらりとした、後姿ごすがたに伸上る。

「可いわねえ。」と、可厭いやな目色めつき。

「黙もくってる。俺おれもこう見えて江戸えど見だ。異いの仮声かゐろがうめえんだ。」

……」

「あら、嬉しい。ひい！」と泣声を放ったり。

「馳走をしねえ、聞かして遣ら。二見中の鮑あわびと鯛しよを背負しよって来や。

熱爛熱爛。」と大手をふった。

これじゃ頓やがて、鼻唄やがも出そうである。

六

「もしもし、貴方。」

と媚なまめかしい声。

溝端みぞばたの片陰かたかげに、封袋ふうたいを切きって晃きらり乎とする、薬すずの錫ひねを捻ひねくって、伏ふ目に辰吉たなぢのイたんだ容よう子すは、片頬かたほに微笑ほほえみさえ見える。四辺あたりに人の居いな

い時、こうした形は、子供が鉄砲玉でも買つて来たように、邪氣無あどけないものである。

水菓子屋で聞いた菓屋へ行くには、彼は、引返して別荘の前をまた通らねば成ならなかつた。それから路みちを折曲まつて、草生くさはえの空地を抜けて、まばら垣かきについて廻まわつて、停車場方角ステーションの、新開と云つた場末らしい、青田も見えて菓屋わらやのある。その中に、廂ひさしに唐辛子、軒だいたいに橙だいだいの皮を干した、……百姓家の片商売。白髪なの婆が目を光らして、見るなよ、見るなよ、と言いいそうな古納戸なめいた裡なかに、字も絵も解とらぬ大衝立おおついたてを置いた。

宝丹は其処そこにあつたが、不思議に故郷に遠い、旅にある心地がして、異はふと薄つかい疲労つかれさえ覺えた。道もやがて別荘の門から十町ばかり離れたろう。

右から左に弁ずる筈を、こうして手に入れた宝丹は、心嬉しく、珍らしい。

「あの、お菓をめしあがりしますなら、お湯か何ぞ差上げますわ。」

唯、片側の一軒立、平屋の白い格子の裡に、薄彩色の裙をほかした、艶なのが、絵のように覗いて立つ。

黒髪は水が垂りそう、櫛巻の房りとした、瓜核顔の鼻筋が通って、

眉の恍惚した、優しいのが、中形の浴衣に黒繻子の帯をして、片手、

その格子に掛けた、二の腕透いて雪を欺く、下緊の浅葱に挟んで、

——玉の葱の茶室を起った。——緋の袱紗、と見えたのは鹿子紋の

撥袋。

片手に象牙の撥を持ったままで、異に声を掛けたのである。

菓の錫を持ったなり、浴衣の胸に掌を当てて、その姿を見たが、

通りがかりの旅人に、一夜を貸そうと云った矢先、巽は怪む気も
ないで、

「恐入りますな。」

「さあ何うぞ。」

と云つて莞爾にっこりした。が、撥ほつそを挙げて齧えくぼを隠すと、向うむきに格子
を離れ、細りした襟ほつその白さ、撫肩なでがたの媚なまめかしさ。浴衣の千鳥が宙に浮
いて、ふつと消える、どカチリと鳴る……何処かに撥を置いた音。

すぐに、上框あがりがまちへすつと出て、柱がくれの半身で、爪尖つまさきがほんのり
と、常夏とこなつ淡く人を誘う。

巽は猶関なおかまわず格子を開けた。

「じゃあ御免なさいよ。」

と、土間に釣った未だ灯を入れない御神燈に蔦の紋、鶴沢宮歳つるさわみやととしと

あるのを読んで、ああ、お師匠さん、と思う時、名の主は……早や次の室まの葭戸越よしどごし、背姿うしろすがたに、薄りうつつと鉄瓶の湯気をかけて、一処ひとどころ浦の波が月に霞んだようであった。

「恐入ります。」

おんな 婦は声を受けて、何となく、なよやかな袖を揺がしながら、黙つて白湯を注いでいる。

「拝借します。」

と巽は其処の上框へ。

二つ三つ、すらすらと畳触り。で、遠慮したか、葭戸の開いた敷居越しなに、撓しなうような膝を支ついて、框の隅の柱を楯たもとに、少し前屈みに身を寄せる、と繻子しゅすの帯がキクと鳴る、心の通う音である。

おんな 「温湯ぬるまゆにいたしましたよ、水が悪うございますから。」

「……御深切に。」

取った湯呑は定紋着、蔦を染めたが、黄昏に、薄りと蒼ずむと、
宮歳の白魚の指に、撥袋の緋が残る。

「ああ、私。」と、ばらりと落すと、下褌の端にちらめいて、
臉に颯と色を染めた、二十三四が艶なる哉。

七

「私、何うしたら可いでしょう。極りが悪うござんすわ。」

と婦は軽く呼吸を継いで、三味線の糸を弾くが如く、指を柱に刻
みながら、

「私、お知己でもないお方をお呼び申して、極りが悪いものですか

ら、何ですか、ひとりで慌てしまって、御茶台にも気が付きません。

……そんな自分の湯呑でなんか。……失礼な、……まあ、何うしたら可うございましょうね。」

と襟を圧えて俯向いて、撥袋を取って背後に投げたが、留南奇の薫が颯として、夕暮の奇しき花、散らすに惜しき風情あり。辰吉は湯呑を片手に、

「何うしまして、結構です。難有う。そしてお師匠さん。貴女の芸にあやかりましょう。」

「存じません。」

と、また一刷毛験を染めつつ、

「人様御迷惑。蚊柱のように唸るんでございますもの、そんな湯呑には子子が居ると不可ません。お打棄りなさいましよ。唯今、別の

を汲替どりかえて差上げますから。」と片手をついて立構たちかます。

辰吉は圧おさえるように、

「ああ、しばらく。貴女あなたがそんな事をお言いなすつちや私は薬が服めなく成ります。この図体ずたいで、第一、宝丹を舐めようと云う柄じやないんですもの。鯨しやちや鯨と掴合つかあって、一角丸ウニコオルを棒で嚙かろうと云うまどろすじやありませんか。」

婦おんなが清すずしい目で、口許くちに嬉うれしそうな笑を浮べ、流眄ながしめに一ちよつと寸見て、

「まあ、そうしてお商売は、貴方。」

「船頭ふねづかでさあね。」

「一寸！ 池川さんのお遊び道具の、あの釣船ばかりお漕ぎ遊ばす

……」

お師匠さんは御存じだ。

「雑ざつど、人違まなじりいですよ。」と眦まなじりを伏せてぐつと呑んで、

「申兼あうしかねましたが、もう一杯ちよう。丁ちようど咽喉のどが渴かわいて困こまっていた、と云いう処ところです。」

艶えんなお師匠しせうさんは、いそいそして、

「お出でばなにいたしまししょうね。」

「菓かを服のみました後のちですから、お湯ゆの方が結構けいこうです——何なにですか、お稽古けいこは日が暮くれてからですか。ああ、いや、それで結構けいこう。」

辰吉たけきちは錆さびのある粋いきな笑わらいで、

「ははは、些ちど厚あかましいようですな。」

「沢山たんどおっしゃいます。——否ちが、最もう片手間かたてまの、あの、些少ほんの真似まね事ことでございます。」

「お呼び申せば座敷ざしきへも……？」

「可厭いやでございますねえ、貴方。」

と片手おがみの指が撓しなって、

「そんな御義理を遊ばしちや、それじゃ私申訳がありません。それで無くってさえ、お通りがかりをお呼び申して、真個ほんどうに不躰ぶしつげだ、と極りが悪うございましてね、赫々かつかつ逆上のぼせますほどなんですもの。」

身を恥じるように言訳がましく、

「実は、あの、小婢こひめを買ものに出しまして、自分でお温習せからじでもしましようか、と存じました処が、窓の貴方しのぶ、葱しの露のの、大きな雫が落ちますように、螢が一つ、飛ぶのが見えたんでございますよ……」

「螢。」

と巽は、声に応じて言返した。

「はあ、時節は過ぎましたのを、つい、珍しい。それとも一ツ星の

光るお姿か知ら、とそう思つて立つたんですが、うっかり私、撥な
んか持つて、螢だったら、それで叩きますつもりだったんでしよ
うかねえ。そんな了簡で、螢なんて、蜻蛉とんぼか蝙蝠こうもりで沢山でございます。」

蜻蛉は寝たから御存じあるまい、軒前を飛ぶ蝙蝠が、べかこ、と
赤い舌を出して、

「これは御挨拶だ。」

ひらり
と翻然やと行る。

八

「それですから、ふつと、その格子を覗きました時は、貴方の御手おて
の御葉の錫をば、あの、螢をおつかまえなすつた、と見ましたんで

すよ。」

器は巽の手に光る。

彼は掌たなそこに据えて熟じつと視みた。

「まあ、お塩梅が沢山たんど悪いんじやありませんか、何しろお上りなすつて、お休みなさいましたら何うでしょう。貴方、御気分は如何です。」と、摺寄つて案じ顔。

巽は眉の凜とした顔を上げて、

「否ちとえ、気分は初めから然さしたる事も無いのです。宝丹は道楽に買つた、と云つて可いくらいなんですが。」

爾時そのとき、袂つづへ突込んで、

「今の、螢には、何だか少し今度は係合かかりあがありそうですよ——然うですか、螢を慕つてお師匠さん、貴女格子際へ出なすつたんだ。」

「貴方のお口から、そんな事、お人の悪い、慕って、と云う柄じゃありません。」

「まあまあ……ですがね、私が宝丹を買いに出たはじまりが、矢張り螢ゆえに、と云ったような訳なんですよ。ふつと、今思出したんです……」

「へええ。」と沈んだような声で言う、宮歳は襟を合せた。

「今度、当地こちらへ来ます時に、然うです。興津おきつ……東海道の興津に、夏場遊んでる友だちが居て、其処へ一日寄ったもんです。夜汽車が涼しいから、十一時過ぎでした、あの駅から上りに乗ったんですよ、右の船頭が。」

「……はあ、可ようございます。ほほほ。」と笑わらいが散ちらぬまで、そよそよ、と浅葱の団扇の風を送る。指環の真珠まゆが且かつ涼しい。

「頂戴しますよ。」

と出してあつた薄お納戸の麻の座蒲団をここで敷いて、

「小さな革靴一つぶら下げて、プラットホームから汽車の階段を踏んで、客室の扉を開けようとするど、ほたりど。」

異は口許の片頬をおさを圧えて言つたのである。

「虫が来て此処へ留つたんです、すつと消え際しなの弱い稲妻か、と思
いました。目前に光つたんですから吃驚びっくりして、邪険に引払うど、最
う汽車が動出す。」

妙にあどが冷つくのです、濡れてるようにね、擦つて見ても何と
もないので。

忘れていると、時々冷い。何か、かぶれでもしやしないかしら、
螢だと思つたものの、それとも出合頭であいがしらに、別の他の毒虫でもあり

はしないかと、一度洗面台へ行って洗いましたよ。彼処あそこで顔を映して見ても別に何事も無いのです、そのうちに紛れてしまう。それでモ汽車で、うとうとと寝た時には、清水だの、川だの、大な湖だの、何でも水の夢ばかり切々に見ましてね、繋きぎに目が覚める、と丁ど天龍川の上だったり、何処かの野原で、水が流れるように虫の鳴いてた事もありましたがね。最う別に思出しもしないで、つい先刻さっきまでそれ切りで済んでいました。

今しがたです……

池川さんの、二階で、」

と顔を見合せた時、両方で思わず頷く様な瞳を通わず、ト仄えた手を膝にして巽はまた笑を含んで、

「……釣舟ちやぶだいにしておきましよう、その舟のね、表二階の方ちやぶだいへ餉台を

繋いで、大勢で飲酒ながら遊んでいたんですが、景色は何とも言えないけれど、暑いでしょう。この暑さと云ったら暑さが重石に成つて、人間を、ずんと上から圧付けるようです。窓から見る松原の蔭簀茶屋と酸漿提灯と、その影がちらちら砂に溢れるような緋色の松葉牡丹ばかりが、却つて目に涼しい。海が焼原に成つて、仕方がない、それじゃ生命も続くまいから、陸の方の青い草木を水にしておけ、と天道の御情けで、融通をつけて下さる、と云つた陽気ですからね。」

「まあ、随分、ほほほ、もう自棄でございますわね、こんなに暑くつちや。」

その癖、見る目も涼しい黒髪。

九

「些^{ちっ}どもでも涼しい心持に成りたくッて、其処等の木の葉の青いのを熟^{じっ}と視^みていて、その目で海を見ると、漸^{やっ}と何うやら水らしい色に成ります。

でないど真赤ですぜ。日盛^{ひざかり}なんざ火が波を打っているようでしょう。——さあ、然うなると不思議なもので今も言^いった通りです。潮煮^{うしお}の鯛の目、鮑の蒸したのが涼しそうで、熱爛の酒がヒヤリと舌に冷いくらい——貴女が云^いった自棄^{やけ}ですか——

夕方、今しがた一時^{ひとしきり}は、風の絶頂で口も利けない。餉台を囲んだ人の話を、じりじりと響くように思^{おも}って、傍目も触らないで松原の松を見ていて、その目をやがて海の上^{うへ}にこう返すと、

異は目を離して指ゆびさしたが、宮歳みやとしの顔を見て、さびた声して低く笑った。

「はははは、ベツかつこをするんじやありませんよ——。然うするど、海の色が朝からはじめて、颯さつと一面に青く澄んで、それが裏座敷まわりえんの廻縁まわりえんの総欄干へ、ひたひたと簾すだれを流すように見えましてね、縁側へ雪のような波の裾が、すつと柔かに、月もないのに光を誘って、遙かの沖から、一よせ、寄せるような景色でした。

悚ぞつと涼しく成ると、例の頬辺ほつぺたが冷りひやとしました、螢の留った処です。——裏を透して、口の裡うちへ、真珠でも含んだかと思う、光るよ
うに胸へ映りました。」

敷居に凭もたれかかり、団扇を落して聞いていた婦おんなは、膝の手を胸へ引いて、肩を細く袖を合せた。

「可厭いやな心持じゃなかつたんです——それが、しかし確たしかに、氷を一片きれ、何処かへ抱いたように急に身を冷して、つるつると融とるらしく、脊筋から冷い汗が流れました。香においがします、水のような、あの、螢の」。

月の柳の雫でも夜露となれば身に染みる。

「私は何かに打たれたように、フイと席を立てて戸外そとへ出ました。まだ明い。内の二階で、波ばかり、青く欄干にかかったようには、暮れてはいません。

名所図絵にありそうな人通りを見ていると、最もう何かも忘れました。が、宝丹は用心のために、柄にもない船頭が買ったんですが。

今の螢のお話で、無遠慮に御厄介くわっに成りました。申訳にもと、思いますから、——私も、無理に附くっ着けたらしいかも知れませんが、

螢の留ったお話をしたんです。」

ど半ば湯呑のあとを飲むと、俯ふしめ目に紋を見て下に置いた。彼は帰りかけの片膝を浮かしたのである。

唯ただ、呼吸いきを詰めて、

「貴方。」

「え。」

余り更まった婦おんなの氣に引入られて驚いた体ていに沈んで云った。

婦おんなは肩を絞るように、身をしめた手を胸に、片手を肱に掛けながら、

「螢じゃありませんわ。螢じゃありませんわ。」

「何がですえ。」

「そりゃ、あの……何ですよ、屹きつと……そして、その別荘のお二階

へ、沖の方から来ましたって、……蒼い、蒼い、蒼い波は。」

柱の姿も蒼白く、顔の色もおもかげだ倂立って、

「お話を伺いますうちに、私は目に見えますようで。そして、跡を、貴方の跡を追って浪打際が、其処へ門まで参っているようですよ。」

ど、黒繻子の帯の色艶やかに、夜を招いてのびあが伸上る。

白い犬が門を駈けた。

辰吉は腰を掛けつつ、思わず足を爪立てた。

十

「貴方、その欄干にかかりました真蒼な波の中に、あの撫子の花が

一束流れますような、薄い紅色の影の映ったのを、もしか、御覽な
さはりはしませんか。」

……と云う、瞳の色の美しさ、露を誘って明いまで。その色に誘
われて、婦が棄てた撥袋の鏡台の端に掛ったのを見た。

我にもあらず茫と成って、

「彼処に見える……あれですか。」

「否、あんなものじゃありません。」とやや氣組んで言う。

「それでは?……」

「否、緋の色なんです。——あの時あの妓——は緋の長襦袢を着て
いました。月夜のような群青に、秋草を銀で刺繡して、ちらちらと
黄金の露を置いた、薄いお太鼓をがつくりとゆるくして、羅の裾を
敷いて、乱次なさったら無い風で、美しい足袋跣足で、そのままス

ツど、あの別荘の縁を下りて、真直まっすぐに小石の裏庭を突切つっつきると、葉のまばらな、花の大きなのが薄化粧して咲きました、」と言いう……

大輪の雪は、その襟を載せる翼であつた。

「あの、夕顔の竹の木戸に、長い袂も触れないで、細ほっそりと出たでしょう。……松の樹の下を通る時は、遠い路を行くようでした。舟の縁へりを伝つわると、あれ、船首みよしに紅い扱帯しじきが懸る、ふらふらと蹠よろけ踏ふたんです……酷く酔つていましたわね。

立直つた時、すつきりした横顔に、纏もつれながら、島田鬻しまだも姿すがたも据すわりました。

私はその時、隣家の淡路館の裏にあります、ぶらんこを掛けました、柱の処ところで見みていたんですよ、一昨年ですわね、——巽すすきさん。」

ど、然しかも震ふるえを帯おびた声こゑで、更さらめて名なを呼よんで、

「貴方に焦れて亡く成りました、あの、——小雪さん——の事ですよ。」

実に、それは、小雪は伊勢の名妓であつた。

辰吉は、ハツと氣を打つて胸を退いた。片膝揚げつつ框を背後へ、それが一浪乗つて揺れた風情である。

褌に曳いたも水浅葱、団扇の名の深草ならず、宮歳の姿も波に乗つてぞ語りける。

「不思議ですわね、あの時、海が迎いに來て、渚が、小雪さんに近く成ると、もう白足袋が隠れました。蹴出しの褌に、藍がかかつて、見渡す限り渚が白く、海も空も、薄い萌黄でござんした。

其処に唯一人、あの妓が立ったんです。筭がキラキラすると、脊の嫋娜とした、裾の色の紅を、潮が見る見る消して青くします。浪

におされて、羅は、その、あの蹴出しにしつとり離れて、取乱したようですが、ああした品の可い人ですから、須磨の浦、明石の浜に、緋の袴で居るようでした。」

——驚破泳ぐ、どその時、池川の縁側では大勢が喝采した。——

「あれあれ渚を離れる、と浪の力に裾を取られて、羅のそのまんま、一度肩まで浸りましたね。衝と立つ時、遠浅の青畳、真中とも思うのに、錦の帯の結目が颯と落ちて、夢のような秋草に、濡れた銀の、蒼い露が、雫のように散ったんです。

まあ、顔が真蒼、と思うと、小雪さんは熟と沖を凝視めました、——其処に——貴方のお頭と、真白な肩のあたりが視えましたよ。

近所を漕いだ屋根舟の揺れた事！

貴方は泳いで在らしたんです。

真裸の男まじりに、三四人、私の知った芸者たちも五六人、ばらばらと浜へ駆けて出る。中には舫かやった船に乗って、両手を挙げて、呼んだ方もござんした、が、最もうその時は波の下で、小雪さんの髪が乱れる、と思う。海の空に、珠かみざしの簪かんざしの影かしら、晃きら々一ツ星が見えました。

十一

「その裸はだか体かなのは別荘の爺やさんでございましたってね。」

「さよう治平と云う風呂番です。」と言いながら、異おちての面めんは面めんの如く瞳が据たつた。

灯ともしなき御神燈は、暮迫る土間の上に、無紋むもんの白張しらはりに髻ぼん髻ふつする。

「爺さんが海へ飛込んで、鉛の水を搔くように、足搔いて、波を分けて追掛けましたわね。」

丁ど沖から一波立てて、貴方が泳返しておいでなさいます——

あとで、貴方がお話しなすったって……あの、承りましたには、仰向けに成って、浪の下の小雪さんが、……嘸ぞ苦しかったでしょう、乳を透して緋の紅い、其処の水が桃色に薄りと搦んでいる、胸を細く、両手で軽く襟を取って、披けそうにしていたのが、貴方がその傍にお寄りなさいました煽りに、すつと立って、鬚に水をかぶって、貴方の胸へ前髪をぐちちより、着けました時、あの、うつくしい白足袋が、——丁ど咽喉の処へ潮を受けてお起ちなすった、——貴方の爪先へ、ぴたりと揃った、と申すじゃありませんか。」

異は框をすつくと立った！

「……吃驚なすって、貴方は、小雪さんの胸を敷いて、前へお流れなさいましたってね。」

「そして驚いて水を飲んだ、今も一斉に飲むような気がします。」と云う顔も白澄むのである。

「其処を爺さんが抜切って、小雪さんを抱きました。ですけれども、最うその時、あの妓の呼吸は絶えていたのです——あの日は、小雪さんは、大変にお酒を飲んでいたんですってね、茶碗で飲んで、杯洗まであげたんだそうですね。深酒の上に、急に海へ入ったもんですから、血が留ってしまっただけでしょう。」

そして、死体に成ってから、貴方のお胸に縫着いたんじゃないやありませんか、海の中で、」

と膝を寄せる、襟が流れて、婦は巽の手を取った。

指が触ると、掌に、婦の姿は頸の白い、翼の青い、怪しく美しい鳥が留ったような気がして、巽の腕は萎えたる如く、往来に端近な処に居ながら、振払うことが出来なかった。……四辺をみると、次の間の長火鉢の傍なる腰窓の竹を透いて、其処が空地らしく幻の草が見えた。

「巽さん。」

「……………」

「あの、風呂番の爺さんは、そのまま小雪さんを負い返して、何しろ、水浸しなんですから、すぐにお座敷へは、とそう思ったんでしよう。一度、あの松に舫った、別荘の船の中へ抱下しましたわね。乗に浜も美しい……小雪さんの裾を長く曳いた姿が、頭髪から濡れてしおしおと舷に腰を掛けました。あの、白いと朧、蒼いと朧玉の

ように澄んだ顔。紅も散らない唇から、すぐに、吻と息が出ようと、誰も皆思ったのが、一呼吸の間もなしにバツタリと胴の間へ、島田を崩して倒れたんです。

お浴衣じゃありましたけれど、其処にお帯と一所に。」

ど婦は情に堪えないらしく、いま、巽の帯に、片頬を熟ど。……一息して、

「貴方のお召ものが脱いで置いてありました。婦の一念……最うそれですもの。……螢はお迎いに行つたんですよ。欄干にかかりました二見ヶ浦の青い波は、沖から、逢いに來たんです。

不便とお思いなさいまし。小雪さんは一言も何にも口へは出さないで、こがれ死をしたんです。

素振、気振が精一杯、心は通わしたでしょうのに、普通の人より、

色も、恋も、百層倍、御存じの貴方でいて、些ちつども汲んでお遣んなさらない！——否いらいえ、小雪さんの心は、よく私が存じております。——

俺は知らない、迷惑だ、と屹きつど貴方は、然そうおつしやいまいしょうけれど、芸妓つとめしたつて、女ひとですもの、分けて、あんな、おどなしい、内気な小雪さんなんですもの、打ちつけに言出せますか。

察しておいで遊ばしながら、——いつも御鬘おきにしろ履を受けていましたものですから、池川さんの、内証おきにしろの御寵妓おきにしろでもあるようにお思いなすつて、その義理で、……あれだけに焦れたものを、かなえてお遣んなさらない。……

堅気はそうじゃあござんすまい、こうした稼業はかの果敢かい事は、金子かねの力のある人には、屹きつど身を任せている、と思われます。

御酒の上のまま事には、団扇と枕を寝かしておいて、釣手を一ツ

貴方にまかして、二人で蚊帳も釣りましたものを。」……と言う。

その蚊帳のような、海のような、青いものが、さらさらと肩にかかる、と思うと、いつか我身はまた框に掛けつつ、女の顔が弗ふっと浮いて、空から熟じっと覗いたのである。

十二

「これが俳優やくしやなの。」

「まあ。」

しよろしよろ、浪が颯なぶるような、ひそひそと耳に囁く声。

松原の茶店の婦おんなの、振舞酒に酔い痴れて、別荘裏なる舫船ふかふねに鼻唄で踏反ふんぞって一寝入りぐツと遣った。が、こんな者に松の露は掛るまい、夜気にこそぐられたように、むずむずと目覚めた六蔵。胴の間
に仰向けで、身うちが冷える。唯と、野宿には心得あり。道中笠を取

つて下腹へ当あてがって、案山子あかしが打倒ぶたれた形でいたのが。——はじめは別荘の客、異辰吉が、一夜の宿をしようと言った、情ある言ことばを忘れず、心に留めて、六が此処に寝たのを知って、（船に苦くるを聳ふいてくれるのじゃないか。）と思つた。

舷ふなばたへ、かたかたと何やら嵌込はめこむ……

その嵌めるものは、漆塗の艶やかな欄干のようである、……はてな、ひそめく声は女である。——

うまれながらにして大好物。寝た振でいて目を働かすと、舷に立かかつて綺麗な貝の形が見える、大きな蛤。

それが、その貝の口を細く開いた奥に、白銀しろがねの朧なる、たどえば真珠の光があつて、その影が、幽かすかに暗夜やみよに、ものの形を映出うつしたす。

「芸妓が化けたんだ、そんな姿で踊おどでも踊おどっていたらう。」

時に、そんなのが一個ひとつではない。左舷の処にも立っている。これも同じように、舷へ一方から欄干らしいものを嵌めた、かたり、ど響く。

外にもまだ居る……三四人、皆おなじ蛤の姿である。

「祭礼まつりの揃そろかな、蛤提灯——こんなのに河豚さざえも栄螺さざえもある、畑はたけの毛けのじゃ瓜うりもあら。……茄子なすびもあら。」

但しその提灯を持つているものの形は分らぬ。が、蛤の姿である……と云うのが、衣服きもの、その袖、その帯と思ふ処がいずれも同じ蛤で、顔と見るのが蛤で、目鼻と思ひ、口と思ふのが蛤で、そして灯ともしびが蛤である。

襟か袖かであるらしく、且つ暗やみの綾あやの、薄紫の影が籠こむ。

時にかたかたと響いて、二三人で捧げ持った氣勢けはいがして、婦おんなの袖

の香立たち蔽おほい、船に柱の用意があつて、空を包んで、トンと据えたは、
屋根船の屋根めいて、それも漆の塗つやの艶、星の如き唐草の蒔絵が散
つた。左舷右舷も青貝摺あおがしずり。

六蔵は雛壇で見て覚えのある車のようだ、と偶ふと思ふ。

時に、蛤が口を開いた。否いや、提灯が、真珠の灯を向けたのである、
六の顔へ——そして女の声で言った。

「これが俳優やくしやなの？」

「まあ。」

「醜きたない俳優やくしやだわね。」

——ままにしろ、此奴等こいつら——と心の裡で、六蔵は苦り切る。

「まだ、来ていやしまいと思つたのに、」

「そして、寝ているんだもの、情じやうのない。」

「心中の対手あいての方が、さきへ来て寝ているなんて。」

「ねえ、」

と忖じて、呆れたように云った、と思うと、ざっと浪が鳴って、潮が退いたらしく寂寥ひっそりする。

欄干も、屋根も、はっと消えて、時絵も星も真の暗闇やみ。

直ぐに、ひたひた、と跽音あしおとして、誰か舷へ来たらしい。

透通るような声が、露に濡れて、もの優しい湿うるみを帯びつつ、

「……巽さん。」

途端に、はっと衣の香かと、冷い黒髪かおりの薫がした。

「ああれ、違って……違っていろいろ。」

十三

蛤の灯がほんのりと、再来またて……

「お退どきよ、退いておくれよ。」

「よう、お前。」

と言う。……人をつけ、蛤なんぞに、お前呼あにばわりをされる兄にい哥いでないぞよ。

「此処は、今夜用がある。」

「大事の処なんだから。」

「よう。」

「仕ようがない。ね、酔っばらつて。」

「臭い事。」

「憎らしい、松葉で突ついで遣りましょう。」

敏捷い、お転婆なのが、すつと幹をかけて枝に登った。呀、松の中に蛤が、明く真珠を振向ける、と一時、一時、雨の如く松葉が灌ぐ。

「お、痛。」

「何うしたの。」と下から云う。

松の上なが、興がった声をして、

「松葉が私を擽るわよ、おほほ、おほほ。」

「わはは。」と浜の松が、枝を揺つて哄と笑う。

「きヤッ。」と我ながら猿のような声して笑つて、六蔵はむつくと起きて、

「姉等、仕立ものの用はねえか。」と、きよとんとして四辺を視た。

浅葱を翻す白浪や。

燃ゆるが如き緋の裳、浪にすつくと小雪の姿。あの、顔の色、瞳の艶、——恋に死ぬ身は美しや、島田のままの星である。

蛤が六つ七つ、むらむらと渚を泳いで、左右を照らす、真珠の光。

凄じいほど気高い顔が、一目、怨めしそうに六蔵の面を視て、さ

しうつむいて、頸えり白く、羅の両袖を胸に犇ひしと搔かきあわ合す、と見ると浪が

打ち、打ち重つて、裳を包み、帯を消し、胸をかくし、島田鬻の浮

んだ上に、白い潮がさらり、と立つ。と磯際の高波は、何とてその

まま沖に退くべき。

颯と寄る浪がしら、雪なす獅子の毛の如く、別荘の二階を包んで、

真蒼まつきおに光る、と見る、とこの小舟は揺上つて、松の梢に、ゆらりと

乗るや、尾張を越して富士山が向うに見えて、六蔵素天辺すてっぺんに仰天し

た。

這奴横紙を破つても、縦に舟を漕ぐ事能わず、剩え櫂櫂もない。

「わああ、助けてくれ、助船。」

「何うしました、何うした。」

人目を忍んで、暗夜を宮歳と二人で来た、巽は船のへりに立つと、突然跳起きて大手を拵げて、且つ船から転がり出した六歳のために驚かされた。

菩提所の——巽は既に詣ではしたが——其処ではない。別荘の釣舟は、海に溺れた小雪が魂をのせた墓である。

「小雪さんを私と思つて。」……

あの、船で手を取つて、あわれ、生命掛けた恋人の、口ずから、切めて、最愛い、と云つて欲しい、可哀相とだけも聞かし給え。

御神燈は未だ白かったのに、夜の暗さ、別荘の門、街道も寝静まる、夢地を辿る心地して、宮歳のかよわい手に、辰吉は袖を引かれて来たのであった。

「へい、仕立ものの御用はねえかね。」

きよろん、とした六蔵より、巽が却って茫然とした。

宮歳の姿は、潮の香のただよ漾う如く消えたのである。

別荘の主人池川の云うのには、その宮歳は、小雪と姉妹のように仲のよかった芸妓である。

内証ながら、山田の御師おし、何某なにがしにひかされて、成程、現に師匠を
している、が、それは、山田の廓、新道の、俗に螢小路と云う処に
媚なまめかしく、意気である。

言語道断、昨夜ゆうべ急に二見ヶ浦へ引越して来る筈はない！

扱て翌朝の事であった。

電話で、新道の一茶屋へ、宮歳みやとしの消息を聞合せると、ぶらぶら病で寝ていたが、昨日急に、変へんが変かわつて世を去つた。

——写真を抱いていましたよ、死際に薄化粧して……異さんによろしく……——

その時、別荘の座敷の色は、二見ヶ浦の、海の蒼いよりも藍であった。

簾に寄る白浪は、雪の降るより尚なお冷い。

その朝、六歳も別荘の客の一人であった。が、お先ばしりで、衆ひとど一所いっしょに、草の径こみちを、幻の跡を尋ねた——確に此処ぞ、と云う処に、常夏がはらはら咲いて、草の根の露に濡れつつ、白檀の蒔絵の、あわれに潮にすさんだ折櫛が——その絵の螢が幽こもりに照てつた。

松に舫おみなえしつた釣舟は、主人あるじの情なさけで、別荘の庭に草を植え、薄、刈萱かるかや、女郎花おみなえし、桔梗ききょうの露に燈籠を点して、一つ、二見の名所である。

（『新小説』一九一六「大正五」年四月号）

使用書体 欣喜堂 KOにしき陳起

組版 島崎肇則

公開 二〇一九年七月三一日

底本 「文豪怪談傑作選・特別篇 鏡花百物語集」

ちくま文庫、筑摩書房

二〇〇九(平成二一)年七月一日第一刷発行

初出 「新小説」

一九一六(大正五)年四月号

※「一寸」に対するルビの「ちやど」と「ちよつど」の混在は、底本通りです。

入力 門田裕志

校正 砂場清隆

二〇一八年九月二八日作成

青空文庫作成ファイル

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.wozok.or.jp/>) (<http://di.gutenberg.org/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。